

Artpoint Reports



東京アートポイント計画

—
アートアクセスあだち
音まち千住の緑

—
500年のcommonを
考えるプロジェクト「YATO」

—
HAPPY TURN／神津島

—
Artist Collective Fuchu [ACF]

—
ファンタジア!ファンタジア!
—生き方がかたちになったまち—

—
東京で(国)境をこえる

—
移動する中心 | GAYA

—
ACKT(アクト／アートセンタークニタチ)

—
多摩の未来の地勢図
Cleaving Art Meeting

—
Tokyo Art Research Lab

2021→2022



Artpoint Reports 2021 → 2022

はじめに

東京アートポイント計画は、地域社会を担うNPOとアートプロジェクトを行う文化事業です。2009年にスタートして、今年で13年目。わたしたちが目指しているのは、日常や地域に芸術文化が根付き、東京というまちが創造的な場所になっていくこと。そのために、アートプロジェクトを担う人材育成や活動基盤の整備なども行っています。

『Artpoint Reports 2021→2022』は、一年を振り返りながら、ちょっと先の未来について考えるレポートです。

もくじ

02 About

02 東京アートポイント計画とは

04 メンバー紹介

05 News

2021の取り組み

09 Voices

2021→2022について語る

09 「支援者の支援」から見えた役割

12 アーティストと協働する可能性

15 社会を「知る」学びの場

18 災間の社会におけるアートプロジェクト

21 「弱い」構えで、社会課題に向き合う

24 Annual costs

事業予算

25 Projects

事業一覧

31 Information

お知らせ

東京アートポイント計画とは

東京アートポイント計画は、地域社会を担うNPOとともに、社会に対して新たな価値観や創造的な活動を生み出すためのさまざまな「アートポイント」*1をつくる事業です。東京都、アーツカウンシル東京*2、NPO*3との共催で行っています。

当たり前を問い直す、課題をみつける、異なる分野をつなぐ——そうしたアートの特性をいかし、実験的なアートプロジェクトを通して、個人が豊かに生きていくための関係や仕組みづくり、コミュニティ育成に取り組んでいます。特徴は、専門スタッフであるプログラムオフィサーが、情報やスキルを提供しながら現場に伴走すること。複数年かけて、NPOが持続可能な活動を行うためのサポートを行っています。

また、アートプロジェクトの担い手のための事業『Tokyo Art Research Lab (TARL) 』と連携することで、社会の変化に応答し続けています。

*1 アートプロジェクトが継続的に動いている場であり、その活動をつくる人々が集まる創造的な拠点のこと。アーティスト、運営スタッフ、ボランティア、参加者などさまざまな人によって形成されと考えています。

*2 アーツカウンシル東京は、都内で文化施設の運営や文化事業の実施を行う公益財団法人東京都歴史文化財団の一組織。都の文化政策に基づき、新たな芸術文化創造の基盤整備をはじめ、東京の独自性・多様性を追求したプログラムなどに取り組んでいます。

*3 特定非営利活動法人（NPO）のほか、一般社団法人など非営利型の組織も含まれます。共催相手には、市区町村などの基礎自治体、大学等も入る場合があります。

「助成」ではなく 「共催」事業



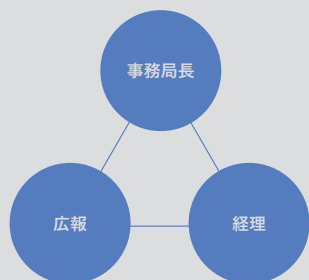
民間と公共でパートナーシップを組む

単発の「イベント」ではなく 「プロジェクト」



年間を通した活動が地域文化をつくる

「拠点」だけではなく 「チーム」育成



持続的な活動のためにNPOを育成

知見を共有する ネットワーキング

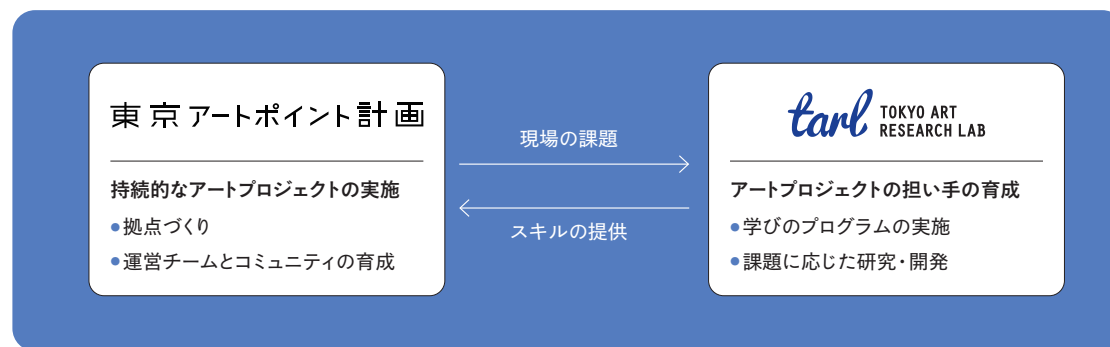
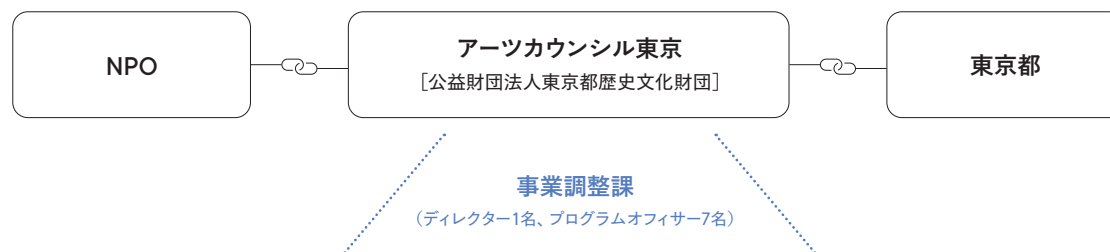


NPOが学び合う関係をつくる

〔組織・人員体制〕

東京アートポイント計画は、アーツカウンシル東京の事業調整課が担当しています。都の文化政策の目的や課題を読み解き、事業の方向性を模索すること、NPOとの対話を重ねながら社会に向き合い、次の一手を仕掛けていくことを目指しています。事

業に伴走するプログラムオフィサーは、「政策」を担当する東京都と「事業」を企画・運営するNPOとの間に立つアートマネジメントの専門職です。文化政策と事業のふたつの視点を行き来することで、文化事業としての社会的意義を高めています。



▶ 共催団体数 | 53団体（2009～2021年度）

NPO：43

基礎自治体：7（豊島区、荒川区、練馬区、足立区、小金井市、三宅村、国立市）

大学：1（東京藝術大学音楽部・大学院国際芸術創造研究科）

財団：2（公益財団法人せたがや文化財団 生活工房／公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団）

▶ 共催事業数 | 42事業（2009～2021年度） *年間約100件のプログラムを実施

▶ Tokyo Art Research Lab受講生数 | 1,742名（2022年2月現在累計）

▶ 共催団体評価・選定会議委員

太下義之（2015～）文化政策研究者

小山田徹（2015～）アーティスト／京都市立芸術大学 教授

西村佳哲（2015～）プランニング・ディレクター／リビングワールド 代表

荻原康子（2015～）「隅田川 森羅万象 墨に夢」統括ディレクター

竹久 侑（2015～）水戸芸術館 現代美術センター 芸術監督

▶ 外部評価委員

芹沢高志（2011～）P3 art and environment 統括ディレクター

2021の取り組み

2年ぶりの 公募を行いました！

執筆 高橋創一

東京アートポイント計画では、2022年度に向けて、ともにアートプロジェクトを行うNPOを2年ぶりに募集しました。お互いのスキルを持ち寄りながら、「パートナー」として、地域課題に文化で向き合うことを目指します。2016年から公募を行ってきましたが、今回は現在の社会情勢に対する応答と、来たるべき社会への準備として、初めて「テーマ」を設定しました。

ひとつ目のテーマは「多文化・共生・コミュニケーション」。分断や孤立が進む社会において、互いを知り、生きやすいコミュニティづくりを目的とします。多様なルーツや身体性など、異なる文化をもつ人々が暮らす社会において、さまざまな人々が協働するための術を探ります。

ふたつ目のテーマ「災害・被災・レジリエンス」は、東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業「Art Support Tohoku-Tokyo」での10年間の経験がもとになっています。現在が災間（災害と災害の間）であるという認識のもと、近

い将来に向き合うことになるであろう困難に対応する力を養っていきます。

コロナ禍によって人と人との関係性は大きく変容し、いたるところでこれまでは見えていなかった綻びが課題となって現れています。学び合いながら、個人では抱えきれない困難にみんなで向き合うために。テーマに応答した新しいアートプロジェクトが、この春からはじまります。▶ p.18,21



公募情報を掲載したウェブサイト

足立区千住地域を中心に、アートを通じた新たな「縁」を生み出すことを目指して活動する『アートアクセスあだち 音まち千住の縁』（以下、音まち）。2011年のスタートから10年の節目を迎え、これまでの縁を可視化する「千住・人情芸術祭」を開催し、プロジェクトの軌跡をまとめた本を出版しました。

千住・人情芸術祭では約1か月間、アサダワタルや友政麻理子などのアーティストを中心にしたプログラムのほか、「1DAYパフォーマンス表現街」を開催。音まちをきっかけに生まれた市民グループなど約50組が、演劇・ダンス・音楽ライブ・盆踊り・大道芸などさまざまなパフォーマンスを繰り広げました。

当日は、会場の東京藝術大学千住キャンパスの教室や廊下、階段、スタジオを使って同時多発的に表現が行われるなか、パフォーマー同士の即興コラボレーションが生まれることも。シンガーソングライターの歌にアコースティックギターが加わりセッションがはじまったり、パフォーマンスに引き込まれて周りの演者も踊りだしたり。これまで音まちにかかわってきた人が一堂に会したのは初めてのことでした。地域外も含めた新

たな参加者も半数いたことで、10年の「縁」が可視化されるとともに、新たな「縁」を予感させる一日となりました。

『アートプロジェクトがつむぐ縁のはなし 絵物語・声・評価でひもとく 大巻伸嗣「Memorial Rebirth 千住」の11年』は、音まち初年度から続く大巻伸嗣「Memorial Rebirth 千住」（通称：メモリバ）に特化した記録集です。プロジェクトを10年支えてきた市民スタッフ、行政、企業、事務局など多様な角度から取材した内容に加え、現代アートチーム目（mé）が描き下ろした絵本も。メモリバの10年とまちの変化を記録しています。



「1DAYパフォーマンス表現街」の様子（撮影 | 大野隆介）

10年間の「縁」が
かたちになりました。



（撮影 | 加藤 甫）

メンバー紹介

ディレクター

1 森 司 (2009～) Tsukasa MORI

1960年愛知県生まれ。水戸芸術館現代美術センター学芸員を経て、現職。Tokyo Art Research Lab、リーディングプロジェクト「TURN」「東京キャラバン」のディレクター。2020年よりCWP（クリエイティブ・ウェル・プロジェクト）のディレクターも務める。「泳いだり歩いたりする時間を日常的にもつようにしています」

プログラムオフィサー

2 大内伸輔 (2009～) Shinsuke OUCHI

1980年茨城県生まれ。取手アートプロジェクトのTAP塾出身。前職は東京藝術大学音楽環境創造科教育研究助手。現在は全体統括を担当。共著に『これからの文化を「10年単位」で語るために—東京アートポイント計画2009-2018—』（アーツカウンシル東京、2019年）。「今年もヤギを育てて、ヤギ使いを目指しています」

3 坂本有理 (2010～) Yuri SAKAMOTO

1981年東京都生まれ。Asian Contemporary Art Week事務局を経て、現職。『東京アートポイント計画が、アートプロジェクトを運営する「事務局」と話すときのことば。の本』の企画・編集や、「ジムジム会（事務局による事務局のためのジムのような勉強会）」の立ち上げを担当。Tokyo Art Research Lab「思考と技術と対話の学校」校長。「こども（1歳）とのやりとりを通して、ユーモアを磨き中」

4 佐藤李青 (2011～) Risei SATO

1982年宮城県生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程満期退学。小金井アートフル・アクション!実行委員会事務局を経て、現職。『Artist Collective Fuchu [ACF]』『移動する

中心 | GAYA』『ACKT（アクト／アートセンタークニタチ）』『多摩の未来の地勢図 Cleaving Art Meeting』、Tokyo Art Research Labを担当。「「災間文化研究」をはじめました」

5 嘉原 妙 (2015～) Tae YOSHIHARA

1985年兵庫県生まれ。前職はNPO法人BEPPU PROJECT。現在『500年のcommonを考えるプロジェクト「YATO」』とTokyo Art Research Labを担当。「手話を勉強中。2021年は感覚がはぐれる一年でした」

6 岡野恵未子 (2018～) Emiko OKANO

1992年茨城県生まれ。前職は茨城県北芸術祭実行委員会事務局。『アートアクセスあだち 音まち千住の縁』『ファンタジア！ファンタジア！—生き方がかたちになったまち—』『移動する中心 | GAYA』を担当。「韓国語の勉強を4年ぶりに再開しました」

7 村上愛佳 (2019～) Manaka MURAKAMI

1993年東京都生まれ、宮城県育ち。東京藝術大学在学中に「自由な女神」プロジェクトをはじめ。2019年より『Artist Collective Fuchu [ACF]』『東京で(国)境をこえる』を担当。「雑草アレルギーになりましたが、公園で寝そべるのが好きです」

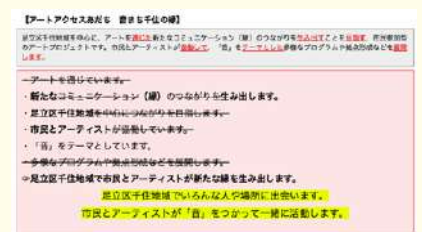
8 櫻井駿介 (2021～) Shunsuke SAKURAI

1990年神奈川県生まれ、東京都育ち。東京藝術大学大学院博士課程修了。インストーラー、アートマネージャーとして活動したあと、現職。『HAPPY TURN／神津島』『アートアクセスあだち 音まち千住の縁』『ACKT（アクト／アートセンタークニタチ）』『多摩の未来の地勢図 Cleaving Art Meeting』、Tokyo Art Research Labを担当。「多肉植物たちと暮らしています」

やさしい日本語に トライしました！

まず行ったのは「伝えたいことを選ぶ」。長くなりがちな一文を、なるべく短く区切り、大事なフレーズだけを選んですっきりさせていきます。次のステップは「難解ワードに向き合う」。よく使いがちな「展開する」も、「プログラムがあります」などに言い換えられます。シンプルにしても伝わるという気づきがありました。

参加者の感想では「同じチームでも大事にしていることの違いに気づき、“これは譲れない”と話し合いが盛り上がった」「自分でも話しやすい文章になった」といった声がありました。それぞれのプロジェクトで、言葉への向き合い方が変わりそうです。



「ジムジム会」で事業紹介文をやさしい日本語に直した

東京アートポイント計画では、9つの共催団体とともに「事務局による事務局のためのジムのような勉強会」(通称：ジムジム会)を2か月に一度行っています。そのなかで「やさしい日本語」の翻訳や心得を学びました。やさしい日本語とは、日本語学習中の外国人やこども、高齢者、障害のある人とのコミュニケーションに活用されている、簡単でわかりやすい日本語のことです。1995年の阪神・淡路大震災の際、日本語を母語としない人が大切な情報を受け取れず、二次、三次被害を受けたことなどがきっかけで生まれました。

企画を担当したのは『東京で(国)境をこえる』の事務局。外国ルーツの参加者からウェブサイトの言葉が難しいという指摘があり、伝え方を試行錯誤してきました。

ジムジム会では、日本語教師の奥村三菜子さん(NPO法人YYJ・ゆるくてやさしい日本語のなかまたち)を迎え、各事業の「定型文」をやさしい日本語に翻訳することにチャレンジしました。やさしい日本語にするためには、伝えたいことを整理し、受け手を想像しながら言葉を具体的かつ簡潔にしていく必要があります。

映像講座 「手話と出会う」が好評です。

Tokyo Art Research Lab (TARL)では、「手話と出会う～アートプロジェクトの担い手のための手話講座」が人気です。この講座は手話の基礎を学び、ろう文化やろう者とのコミュニケーションについて考えていく映像プログラム。主な対象は、手話や身体言語を用いたコミュニケーション力を磨きたい人、アートプロジェクトの現場で手話を使いたい人。YouTubeで学び、希望者はオンラインで実践の場に参加できる「基礎編」と、中級者向けにオンラインを通した「アドバンス編」にわかれています。

基礎編では、自己紹介や挨拶など初心者向けの手話など約20本の映像を公開中。このなかで特に視聴回数が高いのが、ろう文化を学ぶ4本です。『「ろう文化」を知る』回では、手話を用いた短い寸劇を通して、ろう者と聴者の認識の違いを知ることができます。例えば、締め切りについて「9月中」と表現すると、手話では「中」という言葉から「9月中旬」だと理解されることがあります。そのときは「9月30日」と具体的な数字で表現したほうがよいそう。こうした普段何気なく使う身近な表現を例に、手話という言葉の背景に



手話講座の配信風景(撮影 | 齋藤彰英)

外国ルーツの人々と 協働した作品ができました。

え、メンバーが互いにインタビューし合うトークも行いました。まちを歩きながら、自分のアイデンティティを探し、語り合った経験が作品のベースにあります。

「外国ルーツ」と言っても、置かれている状況や背景はさまざま。何語で話すか、コミュニケーションの方法を探るところからはじまります。自分とは異なる他者に出会うことは、自分とも出会い直す時間でした。ともに何かをつくる経験を通して生まれた工夫や発見が、作品に表れています。[▶ p.15]



「Multicultural Film Making」にて撮影現場の様子

多摩・国立地域で 新しい事業がはじまりました！

東京23区の西側に広がる多摩・国立地域で、新しい事業がふたつスタートしました。ひとつは多摩エリアを舞台とした、NPO法人アートフル・アクションによる『多摩の未来の地勢図 Cleaving Art Meeting』。これまで東京アートポイント計画と10年間共催した小金井での活動をベースに、先生や児童養護施設のスタッフとのプログラム、アーティストと一般の参加者がともに地域について学び、考えるワークショップなどを行っています。ここではアートフル・アクションがさまざまな属性をもつ人々の活動のハブとなり、中間支援的な働きをすることを東京アートポイント計画が後押ししています。

もうひとつの『ACKT(アクト/アートセンタークニタチ)』は、一般社団法人ACKT、公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団、国立市との共催事業です。市内の使われていない場所や建物をリサーチし、新しい使い方を考案。人々が集まり、新たな交流や活動が生まれるプラットフォームづくりを目指しています。この3月にはJR国立駅近辺の高架下を会場に、アーティスト/建築家のmi-ri meterによるオンラインワークショップを実施。参加者は事前に受け取ったキットを使



高架下をリサーチしている様子

本に暮らす外国人は、約282万人(2021年6月末現在)。「外国人労働者」や「移民」「難民」などについてのニュースも増えている昨今、国籍や言葉、文化などが異なる人々とのようにともに生きていくのが問われています。東京アートポイント計画とTokyo Art Research Lab (TARL)では、2016年頃から外国ルーツの人々との協働に取り組んできており、2021年度はふたつのプロジェクトの成果をお披露目しました。

さまざまな背景をもつ20～30歳のメンバーによる「kyodo 20_30」では、経堂にて「ここから展」を開催。20名の参加者が「見えない(国)境」について話し合い、多国籍・多文化・多言語の映像やワークショップ、パフォーマンス作品が5つ生まれました。

また、韓国や台湾、中国、フィリピン、アメリカ、ポーランド、アンゴラなど多様な出身地のメンバーからなる「Multicultural Film Making ルーツが異なる他者と映画をつくる」では、協働制作した『ニュー・トーキョー・ツアー』の一日限りの上映会を東京都写真美術館で開催。ワークショップで制作した映像やメイキング上映に加

「支援者の支援」から 見えた役割



大内 伸輔
Shinsuke OUCHI



佐藤 李青
Risei SATO

多摩では、新たに「中間支援」の働きをするNPOをパートナーとした事業をはじめました。
そのなかで獲得した視点や、今後の可能性について語ります。

ネットワークづくりを委ねる

—— 2021年度からはじまった『多摩の未来の地勢図 Cleaving Art Meeting』は、東京アートポイント計画として新たに「中間支援を支援」する立場で事業を行っていますよね。どのような経緯でこの設計になったのでしょうか？

佐藤 多摩地域は都の人口の3分の1が居住しており、面積も都の半分を占めるほどの規模のエリア。まちの成り立ちや、郊外という暮らしの違いなど、多摩には23区とは異なる特色があります。生業と結びついた小さなコミュニティが数多く存在していることもあり、ひとつの地域に絞るよりは、多摩地域全体を見ていく取り組みが必要ではないかと議論をしていました。

大内 そこで小金井で10年間共催事業を行ったNPO法人アートフル・アクションに、広域に点在する小さな活動をネットワーク化するような、「ハブ」の機能を委ねることにしました。活動開始から10年を経て、アートフル・アクションとはパートナーのような関係にあり、わたしたち

の分身的に中間支援の事業を動かしていけるのではないかと思ったのです。

この考え方には、東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業「Art Support Tohoku-Tokyo」を行っていた際に、県ごとに事務局となるNPOにパートナーになってもらった経験がもたっています。現地に近いからこそそのネットワークづくりを行い、細やかな支援が可能になりました。

佐藤 これまで小金井の小学校と連携したプログラムでは、先生たちに学校の課題や要望などをききながら丁寧にやりとりを重ねることで、その場に即した授業づくりを行ってきました。そのなかで、図工の先生から丸太を使うことが難しい、そもそも丸太をどこで手に入れたらいいかわからない、といった声があがり、NPO側で山から丸太をもってきて加工して渡し、さらに道具の使い方の実習をして……といったことがあったんですね。ほかの素材でも同じような声がありました。そうであれば、素材の入手方法を共有したり、扱い方を学び合う先生

た子や「外から来た人」たちのことが気になった子が集まり、アトリエは大賑わい。興望館の「100年の歴史を可視化したい」との要望を受け、さりげなく写真などの資料を置き、こどもたちがその場の歩みを感じられる機会もつくりました。

東京アートポイント計画では、これまでプログラムごとに協働相手を探していましたが、近年では地域パートナーとの連携強化を進めています。そうしたなかで今回の活動は、社会福祉法人とともに取り組む新しい挑戦でもあります。「アート」の枠組みを問い直すようなこの活動は、2022年も続きます。



「トナリのアトリエ」の様子（撮影 | 高田洋三）

2018年から墨田区で活動するアートプロジェクト『ファンタジア!ファンタジア!—生き方がかたちになったまち—』（通称：ファンファン）。その活動の一環として、2021年11月から12月、曳舟駅近くの福祉施設「興望館」を舞台に、そこに通う学童向けのワークショップ「トナリのアトリエ」を開催しました。

現在は保育園や学童クラブ、高齢者の交流拠点などを兼ねる興望館は、もともと1919年設立のセツルメント施設。セツルメントとは、日本では大正期に広がった英国発祥の社会福祉運動のことで、産業化を支えた労働者が困窮した生活を送る地域に学生や表現者が入り、交流を通して住民の心身をケアしました。アートを「よりよく生きる術」と捉え、以前から表現と福祉の関係を模索してきたファンファンのディレクターの青木彬は、その過程で近隣の興望館を知り、家事や手芸にまつわる作品で知られるアーティストの碓井ゆいとワークショップを行いました。

「トナリのアトリエ」では、その名の通り、夕方、体育館に隣接する部屋にお絵かきや工作ができる場をひらいただけですが、体育館で遊び飽き

福祉施設「興望館」との
事業がはじまりました。

ーツカウンシル東京では、2011年から東京アートポイント計画の手法を使って、東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業「Art Support Tohoku-Tokyo (ASTT)」を行ってきました。東日本大震災の被災地域（岩手・宮城・福島県）にて、現地の団体と協働してアートプログラムを実施。震災から10年経ち、2020年度に事業は終了しましたが、災禍に関する取り組みが続いています。

Tokyo Art Research Labのディスカッション「災間の社会を生きる術（すべ／アート）を探る」では、国内外各地の災害復興にかかわるゲストと、これからの時代に必要な態度や技術について議論を交わしました。全6回の議論を手がかりに「災間文化研究」と名付けた活動が生まれています。

また、ふたつのプロジェクトの成果がかたちになりました！ ひとつ目は、東日本大震災から10年目の企画『Art Support Tohoku-Tokyo 2011→2021』の一環として手記を公募した「10年目の手記」から生まれた書籍『10年目の手記 震災体験を書く、よむ、編みなおす』。13人の手記を掲載し、アーティスト・瀬尾夏美と、阪神大震災を記録しつづける会・高森順子、演出家・中

村大地、プログラムオフィサーの佐藤李青が執筆しています。

ふたつ目は、アサダワタルと福島県いわき市の下神白団地のみなさんによるCD『福島ソングスケイプ』です。福島県復興公営住宅に暮らす住民さんにまちの思い出と、当時の馴染み深い曲について話をきいてきた「ラジオ下神白」。これまで収録した住民さんの語りと歌声、そして「伴奏型支援バンド（BSB）」の演奏が一枚のCDになりました。小森はるか監督による記録映像も今後公開予定。ASTTでの経験を、次の10年につなげていきたいと思っています。[▶ p.18]



『10年目の手記 震災体験を書く、よむ、編みなおす』（生きのびるブックス）と『福島ソングスケイプ』（一般社団法人Granny Rideto）

災禍に関する取り組み、
続けていきます。



先生たちと東村山市の山に竹を採りに行ったときの様子（撮影 | 加藤 甫）

たちのネットワークがあれば、授業をひとつずつオーダーメイドでつくらなくても、地域全体でものをつくる環境が向上するのではないか、というアイデアが出ていました。

そこで『多摩の未来の地勢図 Cleaving Art Meeting』では、多摩全域で図工の先生たちと素材や技術を共有する「ざいしらべ」というプログラムを行っています。わたしたちが多摩地域で想定していた事業の展開方法と、小金井での10年の経験値から見えてきた課題が、うまく合致したタイミングだったともいえます。

このほかにも、児童養護施設の職員さんの身体をはぐす「ゆずりはをたずねてみる」、フィールドワークとレクチャーの2部構成で地域について学ぶ「多摩の未来の地勢図をともに描く」の3つのプログラムを行っています。

「中間支援の支援」をする意義

—— 多摩ではこれまでプログラムオフィサーがやってきた働きをアートフル・アクションが行っているわけですが、それをさらに支援する立場としては何をしているのでしょうか？

大内 アートフル・アクションのスタッフと目の前に

ある悩みや困っていることを共有して、1年あるいは数年先の長期的なスパンで人や地域、組織のことを考えるとこうじゃないかな、というように全体設計を描きながら伴走しています。

佐藤 解決の糸口を選択肢として提示しつつも、それを一緒に考えることが増えたと思います。さまざまなかわりの人たちと一緒に現場をつくっていくことが中間支援の特徴です。その人たちの「中間」で関係者が動きやすい立ち回り方を選ぶ必要がある。例えば「ざいしらべ」の場合、仕組みをつくった上で学校の先生たちとどこまで、どうかかわるのか。先生たちは全員同じ目的意識をもっているわけではないので、技術を教えたり道具を渡したりするだけでは十分ではないことも多いんです。とはいえ、自分の手を動かすわけにはいかないし、どこまで動機づけをするかといった課題も出てきています。

大内 これはわたしたちプログラムオフィサー（PO）がいつもNPOとのやりとりで抱えている悩みでもあるので、パートナーとして一緒に悩んで解決策を探っています。

—— 事業をはじめて一年経ったいま、何を感じていますか？

大内 対象範囲が広いですし、公的な組織の人間として学校や行政、地元企業に出向く必要のある場面以外は安心してアートフル・アクションに託しています。そのため、現場との距離は以前より遠くなった感じがしますね。

佐藤 POとして、よりよい現場をつくるために必要な関係者をつなぐ、触媒的な動きがより大事になってきたと思います。

東京アートポイント計画の現場で「いい状態」のときは、POが知らないところで何かが起こったりするんですよ。アートプロジェクトはか

かわる人の現場での経験が、それぞれの生活に「飛び火」していくことが大事ですが、それは現場から遠くなるほど見えにくいものです。けれども、それがいろいろな人に起こることをイメージしながら動きたいと思っていますね。

文化的な手法での「ケア」

—— 多摩の場合、アートフル・アクションをサポートするという「中間支援組織の支援」を通じて、さらに学校の先生や児童養護施設の職員さんを対象とした「支援者の支援」を行っています。こうした「ケア」的な動きはほかにもあるのでしょうか？

佐藤 世田谷区にある生活工房とNPO法人記録と表現とメディアのための組織 [remo] が一緒に行っている『移動する中心 | GAYA』でも、「支援者の支援」が議論にあがっています。ここでは月に一度、昭和の8ミリフィルム映像を見て語り合う「サンデー・インタビューーズ」という活動していますが、高齢者福祉施設に勤務しているメンバーが施設で映像を使って、語り合う場をつくったところ、施設を利用するみなさんが映像に映っているものやその時代について教えてくれたそうなんです。そのやりとりを通して、話し手の人生が見えてくことは、普段の「職員」としての仕事に役立つものかもしれないと気づいたそうです。



児童養護施設の職員さんたちと身体を使ったワークショップをしている様子

東京アートポイント計画は、日常のなかでアートを通じた人と人とのかわりづくりをしています。その知見は、生活のさまざまな場面で「支援」に携わる人たちにとって、目の前で向き合う相手との関係をつくる、ひとつの選択肢になりうるのかもしれないと思います。

大内 アートプロジェクトでは直接的に人を助けるというよりも、状況やコミュニティをつくることで手を動かす場所ができたり、出会う人が増えたりして、そのネットワークが結果的にセーフティネットになります。このことは2009年に東京アートポイント計画が始動した当初から言っていたのですが、「ケア」という言葉が注目されている現在、文化的な手法でのケアの精度をあげていく段階に入っていると感じています。

佐藤 コロナ禍もあって社会の状況がどんどん厳しくなるなかで、複数の分野の専門性をもった人たちが、どのように協働して社会課題と向き合っていくのかを考えていく必要があると感じています。課題の要因は複合的で、当事者になる「前」の準備をどうつくっていくかも大事なのではないのでしょうか。これまで培ってきた経験をいかしながら、他分野の人たちともパートナー関係を築くことで互いの経験や技術を混ぜ合わせ、社会を動かす方法をつくってきたいですね。



自分たちの暮らす地域について写真家の豊田有希さんと学んだ回（全14回）

アーティストと協働する可能性



村上愛佳
Manaka MURAKAMI



櫻井駿介
Shunsuke SAKURAI

神津島と府中では、アーティストが参加したことで大きな変化があった年でした。
改めて、アーティストと協働する可能性について考えます。

アーティストに声をかけた理由

——『HAPPY TURN／神津島』は5年目ですが、今年度初めてアーティストが参加しました。何がきっかけだったのでしょうか？

櫻井 これまで誰もが集まれる「くると」という拠点をづくり、運営してきました。目指すのは、神津島を通して「幸せに生きる」選択肢や、島へのかかわり方を増やすこと。空き家の庭の草刈りをしながら交流する「庭びらき」や音楽会などのイベントも開催していましたが、参加者の層が広がりにくかったり、島外の視点が足りないという課題がありました。そこで、場所や人の魅力を引き出すパフォーマーの大西健太郎さん、染色の技法で作品を生み出す美術家の山本愛子さんに、リサーチから一緒に何かできませんか、と依頼をしました。

——一方で、『Artist Collective Fuchu [ACF]』は、府中市で暮らすアーティストやクリエイターが中心となったチームですが、外部のアーティストとの協働は初めてでしたよね。

村上 ACFは市民団体として2015年に発足して7年ほど活動しているなかで、参加するアーティストが固定化しがちで新たな風穴を開けたかったです。美術家の三木麻郁さんにお声がけしたのは、府中市との市民提案型協働事業として「ラッコルター創造素材ラボ」がはじまったことがきっかけです。ラッコルタは、市内の中小企業が提供した部材を使ったワークショップを行い、企業へフィードバックするラボ。三木さんは梱包用の段ボールを選びました。

——両プロジェクトとも初めての試みということもあり、アーティストの選定にも慎重になったのではないのでしょうか。実際にどのようなプログラムを行ったのですか？

櫻井 大西さんも山本さんも、「これをつくる」という具体的なゴールがない状況からリサーチをして、相談しながら進められるアーティストでした。事務局は「アーティスト」と仕事をするのが初めてで、最初はどのようにかかわっていか、わからなかったんですね。でも大西さんや山本さんと一緒に時間を過ごすなかで、「わ

からないと駄目」から「わからなくてもいいことがある」に変わっていった、不安も解消されていきました。大西さんは島の人に教わって釣りをしたり、海岸の散歩をしたりして、漂流物や空き家の不用品で盆栽をつくるワークショップを。山本さんは島で見つけた明日葉やパッションフルーツ、温泉水などを使って草木染めをするワークショップを行いました。

村上 三木さんは、身近な素材で作品をつくっていること、またこどもや親子向けのプログラムを行っていたので声をかけました。今回はこどもからお年寄りまで幅広い世代の方々が参加しましたが、例えば針金のような鋭利な素材があっても「危ないから使わない」ではなく、先端を保護することで誰でも使える素材にする。そのちょっとした素材の扱い方や、そこから作品をつくっていく技術に長けていらっしゃいます。

今回は「暮らしのなかの表現」をテーマに、オンラインでワークショップを行いました。まずは素材から作品をつくり、それを自宅に飾ってカメラで撮影。写真にすることで日常が表現に変わります。10人以上の参加者がいるなかで、こどもの声を拾いながら、素材の使い方をシェアする方法は勉強になりましたね。

櫻井 場のつくり方という点では、大西さんもワークショップ当日の進行表を自らつくり、「この人がこのグループに入ったらおもしろいことが起きる」と参加者やスタッフの組み合わせまで考えていて、その観察力に驚かされました。

弱い目的が生む役割

——ともにワークショップという共通点はあるものの、神津島はリサーチや滞在をベースにされて、府中ではひとつの素材を軸にオンラインで行われていたという違いもあります。今回のアーティストとの活動を通して、かかわる人たちに変化はありましたか？



「くると盆栽」に島を案内するようにして歩き、風景を見つめ直した（撮影 | 岡 桃子）

村上 ACFはメンバーが多く、それぞれが広報してくれるので、これまで集客には苦労していませんでした。その反面、なかなか同じコミュニティから出ることができなかった。今回はオンラインだったので、地域の外の人にも目を向けた準備ができ、こうした外の視点をもつことが、より活動を豊かにしていくと感じるきっかけになりました。

櫻井 山本さんのワークショップは「景色から染まる色」というタイトル。「ちゃんと染まるように絞らないと、島の“景色”が見えないんだよ」と言っていて。この数年、「くると」で遊んでいたこどもたちでしたが、アーティストとの作品づくりを自分のものにした一幕でした。

プロジェクト全体だと、大きく次のステップに踏み出したように思います。それまで「くると」は、建築家・青木淳さんの言葉を引用すると「原っぱ」的。誰にでもひらかれていて、そこに集う人が能動的に楽しさを発見する場所でした。その「原っぱ」に島の外からアーティストが来て、一緒に活動を行うことになった。

ゆるやかな目的が定められて、「これが欲しいときは誰に相談すればいいんだろう」「〇〇さんはこの担当で」「〇〇さんと同じテーブルで

社会を「知る」学びの場



坂本 有理
Yuri SAKAMOTO



嘉原 妙
Tae YOSHIHARA

Tokyo Art Research Lab (TARL) で目指していく、
これからのアートプロジェクトとその学び方とは。

次の時代のアートプロジェクトとは

—— 東京アートポイント計画と連携しているTokyo Art Research Lab (TARL) では、近年は「災害」「アクセシビリティ」「多文化共生」など社会的にも議論の高まるテーマを扱っています。手話講座をはじめとした多様なコミュニケーションや、外国ルーツの方々との協働をテーマにしていますね。

坂本 2009年に東京アートポイント計画が始動し、創造性が日常的に生み出されるコミュニティや拠点形成、それらの活動を持続的に担う事務局の支援に取り組んできました。そして各地でアートプロジェクトが展開される状況もふまえ、TARLでもアートマネジメントの知見やスキルを学び、マネージャーを育てるところに軸足がありました。

2018年頃から、東京オリンピック・パラリンピック以降を見据え、改めてアートプロジェクトの本質や前提に向き合い、「次の時代のアートプロジェクトを考えていく」ことをより重視するようになっていきます。今後どのようなプロジェクトが必要とされるのか、多様な人がかかわるプ

ロジェクトの運営にはどのような対応や準備が求められるのか、といった視点を育む場になることを目指しています。

嘉原 10年間のTARLの経験を通して、アートプロジェクトの運営に必要なスキルや、方程式のようなものも徐々に増えてきました。でも、それに当てはまらないプロジェクトには、まだ出会っていないのではないか。まだ見ぬプロジェクトへの想像のバネを伸ばすため、多文化共生や災害、身体言語や福祉といったさまざまな領域のことを、わたしたちプログラムオフィサーも一緒に学んでいます。

問いを考える時間が、人生の糧に

—— 具体的なプログラムを見ると、社会的なテーマを扱いながらも、そのなかにTARLらしさがあります。例えば、リサーチや実験を繰り返しながら新たなプロジェクトをつくる「東京プロジェクトスタディ」(以下、スタディ)の、「わたしの、あなたの、関わりをほぐす」(スタディ1)では、参加者自身の表現に主眼を置いていますし、「アートプロジェクトの現場から外国ルーツの若者の支援について考える」(スタディ2)では「アートプロ

作品をつくろう」と、この場所に集まっていた人たちに役割が与えられました。「原っぱ」の過程がなければ、生まれなかった状況です。アーティストによって生まれた「弱目的」のようなものによって、新しい住民も地域に馴染みやすくなる。その兆しが見えました。

—— 「弱目的」とは何でしょうか？

櫻井 藤原辰史著『縁食論—孤食と共食のあいだ』(ミシマ社、2020年)という本を紹介してもらい、そのなかで「弱目的性」という言葉が出てきたのですが、弱い目的によっていろいろな人がその場にかかわりをもてるようになるという意味。アートプロジェクトの現場で起きていることのひとつを表しているなと思います。

ちょっとした、でも大きな一歩

—— 「アーティスト」というと、作品をつくって展覧会で発表するイメージがありますが、仕事内容や影響力は多種多様ですね。改めてアーティストの力はどのようなところにありますか？

村上 アーティストには、作品をつくって発表するだけでなく、コミュニティに新しい視点を与えたり、滞った関係性をほぐしたり、とさまざまな

力があると思います。三木さんのワークショップでは、つくる時間と同じ長さで、できた作品に感想を言い合う時間があるんですね。お互いの作品について「窓に張り付いたタコに見えるね」とか「なぜこの色にしたの?」と、気づいたことや考えたことを言葉にしました。自由に発言していい、という安全な場をつくることもアーティストの力のひとつ。相手の問いかけで、つくった人が自分の考えに気づく場面もありましたね。

櫻井 大西さんと山本さんが島を去ったいま、何が残っているのだろうと考えると、もう一度ワークショップができる感じがあるんですね。大西さんの盆栽も、山本さんの染色も、素材の集め方や組み合わせ方、スタッフの役割分担などもわかったので、再現とまではいなくても、自分たちでもできそうな予感がある。

そう考えると、アーティストによるこのまちのR&D(研究開発)が行われたのだと思います。でも、Research(研究)とDevelopment(開発)以外にも、何かを置いていったような。それは「この素材が足りないから、あの人に電話をかけよう」くらいのちょっとした、でも大きな一歩かもしれません。



島の素材を使って草木染めをした「景色から染まる色」の様子(撮影 | 五十嵐智行)



「暮らしの彫刻」で生まれた作品と家に飾ったときの写真(撮影 | 清田大介)

ジェクト」の手法でできることの可能性を考える内容で、いずれも表現や文化というのが前提にあります。

嘉原 スタディ1では、盲者やろう者、盲ろう者のゲストを迎え、かれらの感覚や認識世界に触れるようなワークショップを行いました。例えば、ドッジボールを行ったあとに、ボールなしでそれを再現したり。記憶を辿りながら、ほんの数分前の自分の身体の動きや癖、言葉を介さないコミュニケーションなどについて意識することで、感覚をほぐしていくものでした。こうした経験を重ねながら、他者との「かかわりのあり方」や「伝え方」について議論を重ね、最後は展覧会でそれぞれのアウトプットを行いました。

—— **それ自体がアートプロジェクトのようですね。メンバーはどのような人がいるのでしょうか？**

嘉原 わたしが担当するスタディでは、以前はクリエイションの仕事に携わる30～40代の方々が多かったのですが、今年度は20代の学生の参加が多い印象です。学生が専攻する分野もファッション、パフォーミングアーツ、情報デザイン、政治学などさまざま。社会人のメンバーには、俳優やダンサーなど身体にかかわる職業の方もいます。

先日、過去に参加したメンバーが、アートプロジェクト「本と川と街」でまち歩きプロジェクトを行いました。かれらは「スタディではひとつの答えを出すのではなく、問いを考え続ける時間を大事にしていた。その時間があつたからこそ、いまこの活動がある」と振り返ってくれました。ともに学び、ディスカッションした時間やメンバーとの関係は、その後の人生のなかで糧になっていくのではないか、と思うんです。それはアート以外の場面でもいきていく。メンバーの様子を見ていて、改めてアートプロジェクトはいろいろな領域に馴染んでいけるも

のだなと思います。

坂本 「東京プロジェクトスタディ」は、プロジェクト未満の活動なので、「スタディ」としていますが、確かにアートプロジェクト的な動きをしていると言えるかもしれませんね。特徴はお互いに学び合うこと。講師がいて知見を享受する生徒がいる、という関係性ではありません。スタディの「ナビゲーター」はあくまで導く存在。わたしが担当したスタディ2では、ナビゲーターに一般社団法人kuriyaの代表、海老原周子さんを迎えました。

kuriyaはかつて東京アートポイント計画と共催していましたが、海老原さんはアートプロジェクトの限界を感じていました。kuriyaに参加するのは主に10代で外国から日本に来ている若者たちですが、経済的、社会的に切実な問題を抱えていて、アートプロジェクトに参加しても才能やセンスを将来にいかしていくのが難しい。福祉や法律、精神面でのケアや、教育や言語、キャリアにかかわるサポートなど包括的な支援が必要で、海老原さんはそれらに対してアートは無力なのではないかという葛藤がありました。スタディ2は、その上でアートプロジェクトの可能性を探るところからはじまっています。

ゲストには、香港アートセンターのマネージャーや、マレーシアでカルチャーワーカーとして活動するアーティストなどを迎えてオンラインレクチャーを開催しました。kuriyaにユーススタッ



スタディ1の感覚をほぐすワークショップ

MFMにて、ルーツが異なるさまざまなメンバーと撮影中の様子



フとして参加していた当事者のアビナッシュ・ガレさんからは「それでもアートプロジェクトに参加した経験は意味のあるものだった」という話があり、また香港アートセンターの活動に参加した若者たちが、映画監督のアシスタントなどを経て映画産業に携わるようになった、といった事例もありました。

求められる複合的な役割

—— **同じ「東京プロジェクトスタディ」でも、スタディ1は参加者同士のコミュニケーションを重視し、スタディ2ではレクチャー形式、と学びのかたちが違いますよね。坂本さんは異なるルーツの人と一緒に映画をつくるプログラムも担当しています。**

坂本 スタディ2は、議論に入る前に、まずは基本的な前提を共有するためのインプットからはじめるため、そのようにしました。また「Multicultural Film Making ルーツが異なる他者と映画をつくる(MFM)」では、参加者は16名いますが、日本で生まれた人、日本に来て1年未満の人、と背景も言語もさまざま。とても仲がよく、いままでない表現を生み出そうとしています。等身大のエピソードを通して互いの文化を知る

機会になったり、自分が所属するコミュニティの枠を超えた関係性を育むきっかけとなったりしているようです。

—— **今後のTARLではどのようなことを目指していくのでしょうか？**

坂本 新しいビジョンやテーマをもち、アートプロジェクトを立ち上げる人が必要だと考えています。それは従来のプロデューサーやディレクター、アーティストの枠を越えるものかもしれません。例えば、スタディ2で取り上げたように、制作に携わりながら若者の悩みをきき、言語的なサポートをしたり、アーティストでありながらソーシャルワーカーの経験があったり、と芸術の領域で活動しながらも役割をまたぐような人です。そうではないと対応できない現場がある。その需要は今後ますます増えていくでしょう。

ただ、アートプロジェクトでありながら社会的なテーマにも向き合うというハイブリッドな経験ができる場はまだ少ないと思います。このような状況のなか、まずは広く社会の状況を「知る」場をつくっていききたい。それは知識の習得に限らず、自ら考えそれを企画に落とし込む方法を「知る」場です。

さい かん 災間の社会における アートプロジェクト



佐藤 李青
Risei SATO



岡野 恵未子
Emiko OKANO

東日本大震災から11年経ち、新たな災害が多発する現在、
「災間」という視点からアートプロジェクトの可能性を語りました。

「災間」の社会を考える

—— 2021年度のTokyo Art Research Lab (TARL) では「災間の社会を生きる術（すべ／アート）を探る」というディスカッションが行われました。公募テーマにも「災間」とありますが、どのような言葉なのでしょうか？

佐藤 災間とは、わたしたちが異なる災禍の「間」に生きているという意味で使っています。東日本大震災の被災地支援事業「Art Support Tohoku-Tokyo」に取り組んでいた頃に民俗学者の赤坂憲雄さんが、社会学者の仁平典宏さんの言葉として紹介していて、知りました。

震災という非常時には平時にあった課題が可視化されました。それは、平時を変えるための議論の材料ともなったはずですが、時間の経過とともに話題にあがらなくなっていく。そのなかで「災間」の視点をもつことは、こうした課題を非日常にあったことではなく、平時の社会を考えることに使えるのではないかと感じました。災害があると、社会のなかで弱い立

場の人たちが一番大きな被害を受けます。赤坂さんは、そこから「弱者を起点に、社会のなかに無駄や溜めをどのように作るか」とも仰っていて、まさに平時での捉え直しが必要だと思っています。

ディスカッションでは、新潟県中越地震以降、被災地にかかわってきた宮本匠さんと、阪神大震災を記録しつづける会の高森順子さんというふたりの研究者をナビゲーターにお招きして、さまざまな災害復興の現場にかかわる4名のゲストに話を伺いました。コロナ禍が続く、各地で災害が多発するなかで、災禍に向き合う態度やかかわり方についての熱のこもった議論を重ねました。

人を知る、土地を知る

—— 「災間」という言葉によって、新たに気づいたことはありますか？

佐藤 ディスカッションで語られた大事なことが、東京アートポイント計画にかかわる現場で既に行



「災間の社会を生きる術（すべ／アート）を探る」の様子



ラジオ下神白のオンライン訪問の様子（撮影 | 小森はるか）

われていると気づく場面がありました。例えば、「人と出会う方法をどうつくるか」という話が出てきましたが、考えてみると、アートプロジェクトでは、普段の役割や肩書に関係なく、人と人が出会う方法をつくってきたなど。それは東京アートポイント計画の手法を震災後の東北で使った「Art Support Tohoku-Tokyo」の現場も同様でした。

岡野 福島県いわき市で行ってきた「ラジオ下神白あのとときあのまちの音楽からいまここへ」（以下、ラジオ下神白）がそうですね。東京電力第一原子力発電所事故によって避難した方が住む復興公営住宅・下神白団地を舞台にしたプロジェクトです。文化活動家のアサダワタルさんが住民さんのご自宅に定期的に訪れ、まちの思い出と当時の馴染み深い曲について話をきき、その語りをまとめたラジオCDを住民限定で配布。「被災者」としてではなく、一人ひとりの人生と出会う試みです。

その団地訪問がコロナ禍によってできなくなったときに、あの人はいまこうしているかもな、と想像することができたんです。それは話をきくことを通して、その人の人柄や体調、生活リズム、ご家族との関係性などを自然と把握していたから。平時で得たものが非常時に役立つ

たとも言えるかなと思います。時間をかけないと見えてこないものがあると実感しました。

佐藤 ラジオ下神白では、2019年に住民さんの思い出の曲を演奏する「伴奏型支援バンド (BSB)」のメンバーを東京で募集しました。震災から時間が経ち、被災地とかかわりにくい時期でしたが、バンドメンバーになることで、現地に足を運ぶきっかけがつかれる。いま思えば時宜にかなっていて、異なる立場の人との新しい出会い方、かかわり方をつくったと思います。

—— 災間の考え方とアートプロジェクトの手法は親和性が高いですね。

佐藤 人と人のかかわりづくりから生まれたネットワークはこれまでのアートプロジェクトでもありました。それが非常時にはセーフティネットとしても機能するのだと思います。

岡野 2019年に台風19号（令和元年東日本台風）が上陸した際に、荒川が氾濫するかもしれない、となり、足立区千住地域で行っている『アートアクセスあだち 音まち千住の縁』の事務局メンバーが避難所に避難したのですが、そこで一緒にプロジェクトをやっているまちのおじちゃんに会ったんです。顔を見てほっとしたし、情報

「弱い」構えで、社会課題に向き合う



森 司
Tsukasa MORI

文化事業者にとって2021年はどういう年だったか。
コロナ禍2年目の変化について語りました。

社会課題に「文化」から応える

—— 2021年の社会状況をどう感じてきましたか？
東京オリンピック・パラリンピックが開催され、
コロナ禍の人の感覚も変わりつつあるように見えます。

1年前、同じように社会状況についてきかれ、「文化事業者としては“待機せよ”と言われた感覚」と答えました。それで言えば、コロナ禍2年目は「応答せよ」ですね。待機は終わり、動きたいけど、動こうとすると感染状況が悪化する。合気道のように押したり引いたり、相手に沿って動くことが求められる状況です。

言い換えるとそれは、社会全体が病とともに生きているということ。「病んだ身体」なら無理はできませんよね。でも、たまには様子を見て散歩くらいしないと。病が特殊ではなく、常に隣にいる。まさに「ウィズ・コロナ」ですね。

—— そうしたなか、森さんたちは特にこの一年、障害のある方などの多様な人とアートを共有する

「アクセシビリティ」の向上に力を入れていました。

通底するのは、マッチョではないコミュニティに学びたいという思いです。派手で即効性があるお金を稼ぐ、従来の「強い」カルチャーが機能しないいま、別の文化のあり方を知りたいければ、違うコミュニティに「留学」するしかない。我々自身が「弱い存在」としてそうしたコミュニティに入らせてもらい、学び、真似する姿勢が重要です。

同時にその「留学」を通して、医療や福祉の領域で、文化に何ができるかを問い直されている感覚もあります。医療従事者がその立場から社会課題に応答しているように、僕たちも文化の立場から現在に向き合わないといけない。

例えば、個人ではなく社会こそが障害を生むという障害の「社会モデル」という考え方がありますが、そこで「違い」にこそ価値を見出す文化が示せることがあるはずです。そのように、文化の視点をもって社会課題や異なるコミュニティに接続できないかと考えています。

練をしましょう、と言うと、防災訓練に関心のある人しか集まらない。そこで、既に行われている活動に減災のゲームなどを加えて、結果として防災訓練になるやり方をするというもの。その渥美さんが仰っていたのが、こどもを対象としたプログラムでは、大人が防災のことをこどもに伝えるために自らが学ばなければならないということでした。

岡野 YATOもこどもを対象としていますが、まずは周囲の大人たちが里山の手入れをしながら、土地のことを学んでいます。大人が試行錯誤することで、それが結果的にこどもたちにもリリティをもって届いているように感じます。

「わざわざやる」ことが大事

—— 災間の視点を得て、いまどんなことを考えていますか？

佐藤 アートプロジェクトの現場では、仕事や日々の人間関係とは異なる人たちと出会います。それによって生き方が変わることもあるし、その土地で生きていく術を得ることにもなると思っています。現場での何気ない会話が大事だというのはよく言われることですが、そういった会話がしやすい状況が自然に生まれるかというと、実はなかなか難しい。一見自然に見える状況を意図的につくりたいと得られないものがある、それがあって、「わざわざやる」ことが大事だと感じています。

岡野 テーマが決まっている取材や討論会のような場は、目的と照らし合わせると効率的かもしれませんが、その枠から外れた何気ない話が実は、その人の「生」にとってすごく大事だったりしますよね。好きなこととか、大事にしているものとか、原風景とか。「わざわざやる」という遠回りをしながら、そういった豊かな語りがふっとこぼれる場をつくるのは、アートプロジェクトの得意技なのではないかと思っています。

交換をして、すごく助けられたと話していました。活動をともにしてきたからこそ、その人の人柄や、これをきいたら教えてくれるというのがわかっていて、頼ることができたのだと思います。

佐藤 ほかに、土地の習慣や歴史を知ることが重要だとも繰り返し言われました。アートプロジェクトをはじめるときには、その地域をリサーチしたり、アーティストがその土地の特徴をふまえて作品制作をしたりします。それは制作プロセスや作品を通じて、脈々と続いてきたその土地の記憶を共有することにつながっているんですね。

岡野 そうやって「知る」際、ただ知識や情報を与える、得る、というかたちにしないことも重要な気がします。例えば、『500年のcommonを考えるプロジェクト「YATO」』（以下、YATO）は町田市にある保育園や寺院を取り巻く里山一帯を舞台にしたプロジェクトです。500年後の人にに向けたイメージで自分たちのお祭りをつくっています。地域の植生や神話を学びながら、こどもたちと影絵芝居をつくったり、木を伐採するワークショップを通して里山のライフサイクルを学んだり、大人が聞き書きした土地の歴史をこども向けの新聞にしたりしながら、次世代への文化の継承を行っています。

佐藤 阪神・淡路大震災から災害復興にかかわってきた大阪大学教授の渥美公秀あつみこうひでさんが、「防災と言わない防災」を提唱しています。防災訓



YATOの拠点にて、里山を手入れしてきた道（撮影|加藤 甫）

「弱さ」から出発しよう

—— いまのお話にもあった「弱さ」は、最近の森さんのキーワードだそうですね。

1995年の阪神・淡路大震災の頃、一種の「弱さ」や「儂さ」が思想的に注目されました。その意味でこれらは新しい視点ではありません。しかし最近、その価値に再び気づき直したところがあります。理由のひとつは、個人的に歳を取ったこと(笑)。突然でなくなることが出てくる。「弱い」ことが日常的にある、いわば「弱い」状態をいかに肯定的に生きるかが、自分にとって重要になってきたのです。

そしてこれは、コロナ禍の社会にあって必要な視点ではないでしょうか。いま、「なぜ以前のようにできないのか」と憤るとしたら、それは「ニュー・ノーマル」を生きていないのかもしれない。大切なのは、まず「できない」ことを認め、そこからどのように折れずに前を向けるかだと思います。

一流のスポーツ選手は、日々のなかで大小の「負け」に真摯に向き合う人たちだと思っています。その先に、未来に向かう明るい引退もある。虚勢の強さではなく、そのような「ちゃんとした受け止め方」に学ぶ必要があります。

—— 「できない」ことからはじめよう、と。

それは、障害者の方々と交流するなかで感じたことでもあります。わたしが接したかれらから受ける強さは、自らの前提を引き取っていることから来るものだと思うのです。だからこそ障害のある方たちは、きちんと人に頼ることもできる。でも、それは実はなかなか難しいことです。

別の例としては、路上生活者の方たちの身体に美を見出し、ともに踊る「新人Hソケリッサ!」(以下、ソケリッサ)というダンスカンパニーがあります。かれらの身体に現代人が失ったよさを見出す価値観がいま、少しずつ認知されてきたと感じます。モデルを

務めたりと、いまやスター的な存在ですよ。

ソケリッサのような存在が重要なもうひとつの理由は、そうした存在がシンボリックになることで、普段、それほど文化に関心を寄せていない人にも何かを届けられることです。従来、わたしたち文化事業者は、何かの第一発見者になること、新しさを開拓することを最大の価値としてきた部分がありました。でも、そうではなく、全体のボリュームを大きくするための事業の必要性も、最近は意識するようになりました。

例えば先日、府中市の『Artist Collective Fuchu [ACF]』というプロジェクトで段ボールを使って「暮らしの彫刻」をつくるワークショップを行い、好評を得ました。以前ならそこで「じゃあ次を」とディレクションするところですが、今回はむしろ、「ヒットしたなら何回もやろう」と言いました。これはつまり「定番化しよう」ということです。

定番化が重要なのは、それによってコミュニティができることです。すなわち、そこに誰かの居場所ができるということ。その居場所は、従来の文化の観点からすれば新しくなく、「弱い」かもしれませんが、それがあことでより多くの人が何かを共有できるのならそれでいいのではないか、と思えるようになった。これも最近の変化です。



地元企業に提供してもらった素材を使った「暮らしの彫刻」(撮影 | 清田大介)

令和4年度は以下のテーマを追求するアートプロジェクトを行うパートナーを募集します。

多文化・共生・コミュニケーション

分断や孤立が進む社会において、互いを知り、関係性を防ぐアートプロジェクト。地域社会において、さまざまな文化を育する人々が息をやすいコミュニティづくりを推進するもの。例えば、「異なる文化的背景を持つ人々が協働する街を導く」プロジェクトや、「コミュニケーション手法の異なる集団士が共創し、共生するあり方をつくる」プロジェクトを求めています。

災害・被災・レジリエンス

近い将来に向き合うことになるであろう、個人では抱えきれない困難に備えるアートプロジェクト。地域社会において、社会や個人が抱える困難に対する対応力を養うもの。例えば、「地域の災害の記憶を被災の知恵として活用する」プロジェクトや、「個人の抱える困難と向き合っている人への文化的処方考案する」プロジェクトを求めています。

2022年度の公募テーマ

視点を滲ませ、広げる

—— 2022年に向けて、仕込んでいることは何ですか？

ひとつは、事業パートナーの公募があります。2016年から公募を行っていますが、今回から共催団体を「パートナー」と呼び、我々が取り組む「多文化・共生・コミュニケーション」と「災害・被災・レジリエンス」というふたつのテーマを一緒に考えていただける方を募るかたちにしました。外に向けて、明確に社会課題への意識を打ち出したのです。

そこで我々が大切にしたいのが、先ほど話した「文化」として社会課題に向き合う姿勢です。ある医療従事者の方が、医療と文化は「近くて遠い、遠くて近い」と仰っていたんですね。その距離感こそが重要で、近くて遠いもの同士に文化は橋を架けることができるはず。そこにできる新しい領域は、次世代の足場になると思います。

お互いに共有できるものを見つけて滲み合うためには、「アートかくあるべし」といった強い構えではなく、やはり弱い構えをすることが大事になります。文化事業者としては、そうした新しい領域を開発したいと思っています。



神津島では、2017年から『HAPPY TURN／神津島』を行っている

また、もうひとつ、プログラムオフィサー (PO) の担当範囲の意識を広げました。いま述べた医療従事者の言葉は佐藤李青からきいたものですが、彼が異分野との間にうまく立てるのは、ずっと被災地支援の「東北担当」として広域を見てきたこともあると思うんです。そうした考えのもと、例えば、「神津島担当」の櫻井駿介に「島担当」の意識をもってもらう取り組みです。

「島担当」になると、神津島の事業をしながら、全国のほかの島で起きている活動についても気にせざるを得ません。今後、島で活動するNPOを広範囲で支える中間支援的な組織をつくるといった、中長期的な構想のイメージも描きやすくなります。

ある事例を考えると、スケールを広げて、俯瞰的に眺めてみる。それは言ってしまうと、POとして専門的に担当する研究テーマの規模感に近いかもしれません。東北担当、島担当、基礎自治体担当……。異なるテーマを扱うチームになれば、人に託す部分も見えてくるし、勉強会をして互いに学んだことを伝え合うことや、「島と福祉を重ねたらどうなる?」といったアイデアも練りやすくなる。そうすると、よりよい中間支援の働き方の新しいイメージを獲得できるのではないかと期待しています。

事業予算

東京都の年間文化振興予算は、146億6400万円です。そのうち公益財団法人東京都歴史文化財団の一組織であるアーツカウンシル東京は、36億3600万円。わたしたちは、2事業を合わせて、年間「1億5000万円」（外部予算を含む）の予算規模で動いています（令和3年度）。予算時点での概算にて、事業予算についてご紹介します*。

東京アートポイント計画 1億800万円

〔財団予算8600万円+外部予算**2200万円〕

tarl TOKYO ART RESEARCH LAB 4200万円

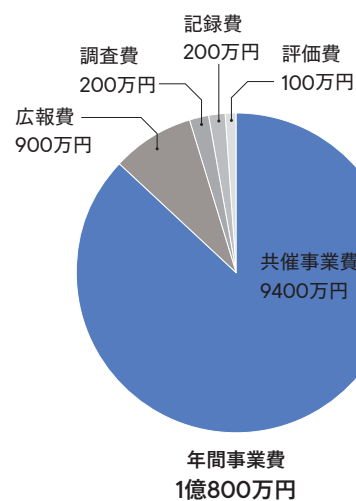
〔財団予算4200万円〕

*金額はすべて「約」です。 **基礎自治体負担金等。

東京アートポイント計画では、共催団体と協議し、毎年予算計画を立てています。どのくらいの規模であれば、無理なく運営ができるのか。事務局を担うNPOの体力や伸びしろを見極め、予算を調整。2年目以降の事業は増額してマネジメント力を鍛えたり、あえて減額して活動の質を高めたりするなど、常に事業の適正規模を探っています。

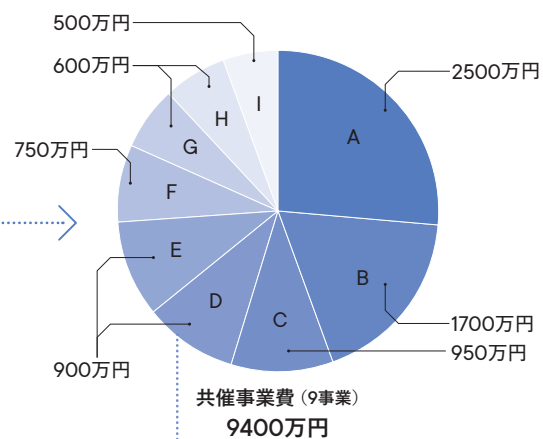
〔東京アートポイント計画の年間事業予算内訳〕

事業予算の大部分は、「共催事業費」です。そのほかに共催団体を含むすべての活動の「広報費」、出張や書籍購入などに使う「調査費」、事業の「記録費」「評価費」があります。



〔各共催団体の年間事業予算内訳〕

4つの共催期間「立ち上げ・育成（1～3年）」「連携・支援（4～6年）」「パートナー（7～10年）」「フォローアップ」や事業の目的、特徴に合わせて、適正規模を協議。立ち上げは300万円からスタートすることが多く、それ以降は外部予算の状況により1000万円以上になることもあります。

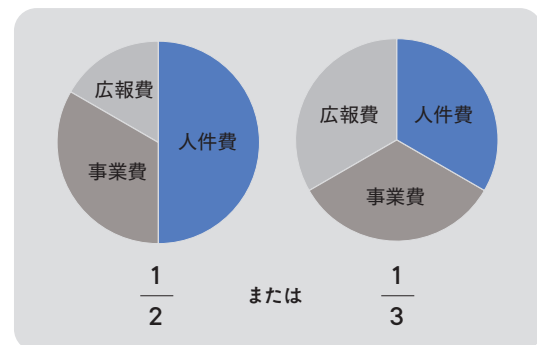


内訳

割合

〔共催団体における予算の割合例〕

アートプロジェクトでは、企画制作費に対する助成がほとんどで、人件費も含めた支援はまだ国内では多くありません。東京アートポイント計画では、持続可能な活動を行うために、共催団体の「人件費」を全体予算の1/2または1/3の割合になるように設計しています。



Projects

事業一覧

2021年度の東京アートポイント計画は、都内のさまざまな地域で9つの事業を行いました。自分たちの活動拠点を地域にひらいている場所もあります。



1 東京アートポイント計画

<https://tokyoartpoint.jp>

▶ アートアクセスあだち 音まち千住の縁



(撮影 | 大野隆介)

市民とともに、まちに新たな「縁」をつくる

人とのつながりが希薄になっている現代社会において、アートを通じた新たな「縁」を生み出すことを目指すアートプロジェクト。足立区千住地域を中心に、市民とアーティストがともに「音」をテーマとしたプログラムを行っている。無数のシャボン玉でまちの風景を変える大巻伸嗣「Memorial Rebirth 千住（メモリバ）」や、だじゃれをきっかけに新しい音楽を生み出す野村誠「千住だじゃれ音楽祭」、日本に暮らす外国ルーツの人々の文化を知る「イミグレーション・ミュージアム・東京（IMM東京）」などを開催。

2021年度の活動

共催最終年度として、10年間の「縁」を可視化する「千住・人情芸術祭」を行った。これまで協働してきたアーティストとの企画に加え、プロアマ問わず市民から出演者を公募した「1DAYパフォーマンス表現街」を開催。常連さんから初参加者まで、区内外から約50組のパフォーマーが集結し、思い思いの表現が繰り広げられた。

また、メモリバでは、シャボン玉マシンを家に届ける「メモリバのホームステイ」などの活動が動き出した。「千住だじゃれ音楽祭」は、海外のミュージシャンとオンラインで新たな音楽表現を生み出している。IMM東京では、外国ルーツの人々とともに展覧会を開催し、多文化社会のありようを多角的に提示した。

共催 2011～2013年：東京藝術大学音楽部、特定非営利活動法人やるネ、足立区／2014～2015年：東京藝術大学音楽部、特定非営利活動法人音まち計画、足立区／2016年～：東京藝術大学音楽部・大学院国際芸術創造研究科、特定非営利活動法人音まち計画、足立区

場所 足立区内各所

URL <https://aaa-senju.com>

▶ 500年のcommonを考えるプロジェクト「YATO」



次世代を担う子どもと500年後を考える

「谷戸」と呼ばれる、丘陵地が侵食されて形成された谷状の地形をもつ町田市忠生地域。「すべて、子ども中心」を理念とする『しぜんの国保育園』や寺院を取り巻く里山一帯を舞台に、地域について学びながら、500年後に続く人と場のあり方（＝common）を考えるアートプロジェクト。アーティストや音楽家、自然環境や歴史などの専門家や地域の団体と連携し、次世代を担う子どもと大人と一緒に取り組む企画を行っている。

2021年度の活動

地域をリサーチしながら影絵人形をつくる「影絵ワークショップ」や土器楽器づくり、「木の伐採ワークショップ」など、人間と自然の営みを考えるプログラムを実施。毎年秋に開催している「YATOの縁日」は、感染症対策により映像収録に。対面で参加する予定だった子どもたちには「この状況に対してどう感じているのか」を率直に尋ね、子どもの声を大人たちが受け止める時間をつくった。

寺院の遊休施設だった「こもれび堂」を子どもたちが集まれる拠点として改修し、椅子や棚にもなる箱型の家具づくりも行った。

また、忠生の歴史を伝える季刊『YATOかわら版』や、土地に暮らす人々の視点を通して、地域の物語や風土を味わう『YATOの郷土詩』、活動に対する想いやお祭りを幅広い世代に伝える『YATOの絵本』を制作した。

共催 社会福祉法人東香会

場所 町田市忠生地域

URL <https://yato500.net>

▶ HAPPY TURN／神津島



(撮影 | 小野悠介)

島暮らしの「幸せなターン」のかたちを探る

豊かな自然、そして神話や独特な風習が残る神津島。人々が島での暮らしに愛着をもち、自分ごととして島にかかわる土壌を育むプロジェクト。日常で起きる新たなものごととの出会いや、発見によって、自分で掴む変化のきっかけを「幸せなターン」とし、これからの生き方のヒントを探る。もともと島に住んでいた人だけでなく、移住者や島を離れて暮らす人などがつながり、それぞれの文化や考え方を学び合う場をひらいている。

2021年度の活動

子どもや子育て世代が多く集まる拠点「くると」に、思い思いの学びを深め、伝え合う自習室「MANABU」をリニューアルオープン。さまざまな世代やニーズに向けたプログラムを試行錯誤した。空き家の庭の草刈りをしながら島民が交流する「庭びらき」も継続的に行っている。

さらに、「アーティスト・プログラム in 神津島」を実施。アーティスト・大西健太郎による「くると盆栽流し」では、島に流れ着いた漂着物や島内の資源を組み合わせ、子どもたちとオリジナルの盆栽をつくり、展示した。また、島の外からやって来た盆栽に見せたい風景を探しに村中を練り歩き、いつもとはちよっと違う視点で島の暮らしを見つめる機会が生まれた。

美術家・山本愛子による「景色から染まる色」では、島ならではの素材をみんなで集め、刻んだり煮立てたりする染色ワークショップを行った。常連さんだけでなく、さまざまな参加者が島の資源から生まれた鮮やかな色や香り、音を楽しんだ。

共催 一般社団法人シマクラス神津島

場所 神津島村

URL <http://happyturn-kozu.tokyo>

▶ Artist Collective Fuchu [ACF]



「誰もが表現できるまち」を目指して

郊外にある住宅地・府中市は、暮らしのなかで、創作や市民活動など、さまざまな「表現」を行う人々が多く集まっている。そうした、職種も年齢も多様なメンバーが、自分の思考や感覚を伝え合いながら活動している。異なる視点に触れ、互いの違いを尊重できる、自由で活発な「誰もが表現できるまち」を目指すプロジェクト。

2021年度の活動

府中市の市民提案型協働事業の一環として、「ラッコルター創造素材ラボ」をスタート。地域の民間企業に不要な部材を提供してもらい、それを素材として表現のために再利用する仕組みだ。初回は、端材である段ボールのパーツを素材に使用して、美術家・三木麻都と「暮らしの彫刻」をつくるワークショップと展示を行った。参加者や企業からの好評を得て、今後の継続的な活動に向け、地域ぐるみの仕組みづくりについて議論を重ねている。

また、ACFのこれまでの歩みを振り返る小冊子『あなたの暮らし、どんなカタチ?』を発行。未来の「まち」や「暮らし」をつくるために、アーティストだけではなく、地域に暮らすさまざまな人たちにに向けて制作した。

共催 特定非営利活動法人アーティスト・コレクティブ・フチュウ

場所 府中市

URL <https://acf-tokyo.com>

▶ ファンタジア! ファンタジア!—生き方がかたちになったまち—



「当たり前」を解きほぐし、創造力を育む

「墨東エリア」と呼ばれる墨田区北東部は、2000年代初頭の住民主導のアートプロジェクトをきっかけに、現在も多くのアーティストが暮らす地域。そこを舞台に、地域の人々がアーティストや研究者との出会いを通して、豊かに生きるための創造力を育む「学びの場」を生み出す試み。他者との対話で生まれる気づきを通して、自分自身の想像の幅を広げ続け、自分のなかの常識や「当たり前」を解きほぐす小さな実験を仕掛けている。

2021年度の活動

1919年に発足した福祉施設「興望館」と「100年の記憶」をテーマにプロジェクトを始動した。アーティストの碓井ゆいを迎え、まずはセツルメント施設としてはじまった興望館や地域の歴史をリサーチ。そのなかで、たくさんの写真や保育日誌、同人誌などの膨大な記録に出会った。それらを新しい手法で継承したり学ぶために、こどもたちと一緒にZINEをつくる「トナリのアトリエ」を立ち上げた。ZINEづくりをきっかけに、興望館での思い出や歴史に触れることができる場が生まれた。

また、墨田区で行われている文化活動のアーカイブをつくるプログラム「スミログ」もスタートした。記録に残りやすい明確で大きな出来事のみならず、臍げで小さな出来事なども集め、「みんなが使える」アーカイブを模索した。公募メンバーとの活動「ファンファン倶楽部」では、「安心して楽しく“もやもや”しよう」をテーマに、それぞれが感じる日々のささやかな違和感や気になること、挑戦してみたかったことなどを持ち寄って、全員で共有・実践をした。

— 共催 一般社団法人藝と

場所 墨田区内各所

URL <http://fantasiafantasia.jp>

▶ 東京で(国)境をこえる



「見えない(国)境、壁」について考える

多くの在留外国人や海外にルーツをもつ人々が生活する東京。「東京には見えないことにされているさまざまな壁がある」という仮説をもとに、その「見えない(国)境、壁」について考えるプロジェクト。東京に生きる人々、特に海外ルーツの人々が感じている「個人と他者／社会／世界との境界」と、それにまつわる問題を探りながら、日常的に出会いが生まれる場づくりを目指す。

2021年度の活動

2030年に社会を担う20～30歳と行うプロジェクト「kyodo 20_30」を通年で行った。月2回程度、ワークショップや、多文化共生に関するレクチャーや対話を重ね、そこでの気づきを海外にルーツをもつメンバーとともに作品にした。「ショットムービー」では、ベトナムや中国などさまざまな国籍のクリエイターが参加し、国際共同制作のように。最終的に成果発表として世田谷区経堂にて「ここから展」を行った。

また、参加者募集や活動レポートなどの情報発信では、日本語が母語でない人たちに向けて「やさしい日本語」に挑戦。どんな人にも伝わりやすい表現を探るなかで、結果的にメンバー内のコミュニケーションも向上した。

普段は意識できていない境界や断絶を考えるためのプログラム「サカイノコエカタ」ではさまざまな分野における越境者を招き、参加者と対面で議論。「当事者である／でない」という二項対立から自由になるためのヒントや、背景の異なる他者や場所とかわろうとするとときに見えてくることについて語り合った。

— 共催 一般社団法人shelf

場所 世田谷区ほか

URL <https://www.tokyokokkyo.tokyo>

▶ 移動する中心 | GAYA



ホームムービーを囲んで、語りの場をつくる

2015年から世田谷区内で収集・デジタル化されてきた、昭和の世田谷を映したホームムービーを活用して、語りの場をつくるコミュニティ・アーカイブプロジェクト。初詣、海水浴、運動会、遊園地、雪遊びといった、8ミリフィルムに写された記録をきっかけに、自分たちの生きる「いま」を考える。また、プロジェクトとともに動かす担い手の育成も目指す。

2021年度の活動

ホームムービーをきっかけに語られる声の採集を目指して「サンデー・インタビューーズ (SI)」のメンバーを新たに募集した。8ミリフィルムの被写体であるロスジェネのメンバーは、毎月第4日曜日にオンラインで集合。映像をじっくりひとりで「みる」、気づいたことをみんなで「はなす」、気になったことを人や資料に「きく」という3つのステップに取り組んだ。その様子はnoteの記事「SIは見た」となり、世田谷区にある生活工房では8ミリフィルムの展示上映に合わせて印刷版が配布された。

あるメンバーは、勤務先であるデイサービスの現場で、高齢者の方々と一緒にムービーを見て話をきいた。例えば、再生された雪遊びのシーンから、当時の暮らしぶりが語られる。その言葉は聞き手にとって、過去の価値観を経由して現在を知る手がかりになる。異なる世代をつなぐ試みとしての可能性が見えた。

— 共催 特定非営利活動法人記録と表現とメディアのための組織 [remo]、公益財団法人せたがや文化財団 生活工房

場所 世田谷区

URL <https://aha.ne.jp/project/gaya>

▶ ACKT (アクト／アートセンタークニタチ)



まちに新たな活動が生まれる拠点をつくる

国立市文化芸術推進基本計画に基づき、アートやデザインの手法を使って、地域に新たな交流や活動を生み出す拠点づくりを行うプロジェクト。市民と行政が連携し、地域や社会の課題に向き合い、新たな文化をつくる多様な活動のプラットフォームの構築を目指す。

2021年度の活動

初年度は、市内の空きスペースや遊休施設を活用する取り組みに着手。事務局メンバーが、これまで国立市で活動しながらつくってきたネットワークをいかし、市内のさまざまな場所に足を運び、リサーチを重ねた。

遊休スペース活用の第一弾は、JR国立駅付近の高架下。アーティスト／建築家のmi-ri meterと空間の設えと人々の交流の仕組みを構想し、参加者と体験を共有するプログラム「URBANING_U ONLINE」を開催した。アーティストの指示が書かれたカードなどのキットを使い、参加者が自分の生活空間をいつもとは異なる視点で体験した。また、国内の先行事例をリサーチしたレポート記事を公開した。

今後は、国立市の南北のエリアをつなぐアプローチを検討している。

— 共催 一般社団法人ACKT、公益財団法人くにたち文化・スポーツ財団、国立市

場所 国立市

URL <https://www.artscouncil-tokyo.jp/ja/what-we-do/creation/hubs/ackt/48483>

▶ 多摩の未来の地勢図 Cleaving Art Meeting



(撮影 | 加藤 甫)

一人ひとりが自分の暮らす足元を見つめ直す

多摩地域の「地勢」を探ることを通して、一人ひとりが自分の暮らす足元を見つめ直すプロジェクト。2011～2020年度に東京アートポイント計画と共催したNPO法人アートフル・アクションが、多摩地域における中間支援的な働きをしながら、小学校や児童養護施設など多様な団体と協働して事業を行っている。

2021年度の活動

初年度は、主に3つのプログラムを行った。「ざいしらべ 図工—技術と素材について考える」では、大木の根っことなど入手困難な自然素材の提供を行い、素材の扱い方や、染めなどの伝統技法について先生が学ぶ機会をつくった。東村山市立南台小学校に素材の収蔵庫も設置した。

「ゆずりはをたずねてみる—社会的養護に関わる人たちとともに」では、児童養護施設「二葉むさしが丘学園」の職員さんを対象に身体をほぐすワークショップを開催。困難を抱えた子どもたちと向き合い、日々の業務に多忙な支援者のケアに取り組んでいる。

連続ワークショップ「多摩の未来の地勢図をともに描く—辺境としての東京を外から見る」は、オンラインで実施。写真家・豊田有希をゲストに迎えたフィールドワーク編と、社会的養護、水俣病、ハンセン病などにかかわるゲストによるレクチャー編を交互に開催。それぞれの日々の活動を後押ししていくことを目指した。

共催 特定非営利活動法人アートフル・アクション

場所 多摩地域

URL <https://cleavingartmeeting.com>

Information

Mail News



毎月1回、メールニュースをお届けしています！

アートプロジェクトの現場の最新のイベント情報やレポートなどを「Artpoint Letter」としてお届けしています。希望される方は、こちらからご登録ください。



Book



『これからの文化を「10年単位」で語るために—東京アートポイント計画2009-2018—』(2019年)

中間支援の9の条件、これまでの歩み、プロジェクトインタビューやドキュメント一覧など、10年間の試行錯誤を収録。下記にてPDFを公開しています。

https://tarl.jp/library/output/2018/artpoint_2009-2018



事業で制作した記録集やメディアをPDFで公開しています。

Tokyo Art Research Lab (TARL) のウェブサイトでは、東京アートポイント計画やTARLで制作した冊子等のPDFを250点以上公開しています。事業運営や研究に、ぜひご利用ください。

<https://tarl.jp/library>

2 Tokyo Art Research Lab (TARL)

<https://tarl.jp>



アートプロジェクトに必要な技術を学ぶ

アートプロジェクトを実践する人とともにつくり上げる学びのプログラム。現場の担い手を育てる「思考と技術と対話の学校」と、新たなスキルやシステムをつくる「研究・開発」の2軸で、東京アートポイント計画と連動しながら、来たるべき社会に向けたリサーチを行っている。

2021年度の活動

「思考と技術と対話の学校」では、「レクチャー」「ディスカッション」「東京プロジェクトスタディ」の3プログラムを実施。手話の基礎やろう文化について学んだり、災害との向き合い方について異なる分野の専門家同士が対話する連続講座を行った。「東京プロジェクトスタディ」では、感覚世界や身体性の異なる他者とのコミュニケーションを促すメディア開発に取り組んだり、外国ルーツの若者支援について考えたり、ウェブサイトにつわるもやもやについて議論したりと、これからのアートプロジェクトに必要な視座を獲得するスタディ（勉強、調査、研究、試作）を重ねた。

「研究・開発」では、ルーツが異なる他者と協働するための技術や表現の開発を目指す映画づくりに加え、東京アートポイント計画の共催事業『アートアクセスあだち 音まち千住の縁』の約10年間を検証する記録集を制作した。

また、アートプロジェクトにおけるアーカイブ活動のこれからを考えるクロストークなど、これまでの実践の蓄積を活用した。

Artpoint Reports

2021 → 2022

編集 | 川村庸子

執筆 | 佐藤恵美、杉原環樹、高橋創一

アートディレクション&デザイン | 北岡誠吾

印刷 | 株式会社歩プロセス

プログラムオフィサー | 坂本有理・岡野恵未子（アーツカウンシル東京）

監修 | 森 司（アーツカウンシル東京）

発行 | 2022年3月25日 第1刷発行

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

〒102-0073

東京都千代田区九段北4丁目1-28 九段ファーストブレイス8階

TEL 03-6256-8435 FAX 03-6256-8829

<https://www.artscouncil-tokyo.jp>

©アーツカウンシル東京

ISBN978-4-909894-30-4 C0070

